

銃後の日露戦争 『穂積歌子日記』を読む

塩崎文雄 所員／表現学部教授

1——紀元節の祝宴

1904年（明治37）の紀元節の夕べ、東京市牛込区弘方町にあった穂積陳重邸では、日本橋で名代の仕出し弁当屋「弁松」から、各種の折詰弁当を取り寄せている。各種といったのは、20銭相当の弁当20人前、30銭相当のそれが14人前、45銭相当が8人前の、3ランク総計42人分が、注文の内訳だったからである。忙しさにかこつけて、子どもたちや使用人たちにも30銭のものを、別途、ふるまっている。トータルで60人前近くの注文ということになるろうか。それとは別に、神田淡路町の洋食屋多賀羅亭にも、西洋料理の仕出しを申しつけている。多賀羅亭は『東京名物志』（公益社、1901）にあげられている西洋料理店14店のうちで、「料理の佳なるに比し廉直なるを以て都下屈指の家と為れり」と記されている店である。当日の『穂積歌子日記』にいう。

紀元節、昨十日夜宣戦の詔勅出づ。(……) 今日紀元節の祝儀及海軍勝利祝の為将校兵士らへ赤飯ふるまはんとて弁松へ申付け折詰弁当とり寄す。明屋^{あきや}寄宿風紀衛兵へ二十銭の折二拾。織田宅兵士へ三拾銭の折六。宅将校へ四十五銭の折八ツ。宅兵士三拾銭八ツ。(……)

食堂用意とのひ夕六時半、永田少佐を始将校達を案内す。其人名は永田少佐。山口大岡両中尉。伊東川口両軍医。松崎中尉。若林主計。大寫少尉。細川伍長等九人なり。始めに御宴の御盃にて日本酒を出し、西洋料理終り際にシャンパンを出す節、旦那様より挨拶の詞を述べ給ひ、永田少佐の答礼ありて後祝盃をあげ、御料理を取り廻す。食事中も戦捷の号外来り山口中尉これをよみ上げ皆々万才をとなえ、その外いろいろの戦話にて賑わし。

日記の執筆者穂積歌子は渋沢栄一の長女で、穂積陳重に嫁した。このとき42歳。嫡男重遠をはじめとして、四男三女の母である。渋沢栄一についてはくどくどしい説明は省く。夫穂積陳重は、よく知られているように、東京帝国大学法学部長

兼貴族院議員、枢密院議長等を歴任した明治法学界の重鎮である。弟に同じ法学者の穂積八束、義弟に西園寺内閣で蔵相を勤め、のち東京市長などを歴任した阪谷芳郎もいる。『穂積歌子日記』は、1890年から1932年までの足掛け43年にわたる日記である。孫の重行の手で『穂積歌子日記——明治一法学者の周辺』（みすず書房、1989）と題して公刊されている。公刊分は1890年から1906年までの前半部にとどまり、その上、「全体を四分の一程度に圧縮した」とある。それでも千頁になんなんとする浩瀚な日記である。以下の記述は、穂積重行の業績に負うところが多い。あらかじめ断っておく。

実は、とことごとしく断るほどのことではないが、このところ学生たちと一緒に、明治の婦女子が〈洋食〉なるものに出会った跡をたずねている。それというも、近ごろ〈洋食事始〉風のグルメ本が量産されている。ところが、それらの多くは、レストランや料理屋側が洋食を提供した記録を追うのに急だからである。それらの場所に入入りした客の多くは、主として社会的活動を担った成年男子であった。現に、歌子の夫穂積陳重にしてからが、その社会的地位を顕著に反映して、築地および上野の両精養軒、帝国ホテルをはじめとして、常盤屋や星ヶ岡茶寮、亀清、八百松、植半、偕楽園、紅葉館等々の、名だたる一流料亭に入入りするのは日常茶飯事であった。父の渋沢栄一もまた、同様な足跡を残している。

それに対して、家庭婦人の歌子の去就はどのようなようだったのか。現在のように外食産業がさかんでなく、また外食の習慣をもたない就学中の子どもや未婚の娘たち、家庭婦人たちのほとんどは、冠婚葬祭のみに夫や父兄に伴われて、わずかにそれらのレストランに入入りするチャンスを除いては、市中の料理屋で飲食する機会などはほとんどなかったはずだからである。アッパーミドルからごく普通の女性たちまで、彼女たちの洋食体験の帰趨はなかなか興味深い。

しかし、この論ではそこには主眼がない。そうではなくて、「弁松」から仕出し弁当を取り寄せて出征兵士たちを歓待する、という家庭婦人としてはかなり異例なイベントの方にこそ、本稿の主眼はあるのである。

2——貴婦人のホスピタリティ

この夜のイベントを論ずるためには、あらかじめ多くの補注を必要とするであろう。

日記冒頭の紀元節についてはあらためて贅言しない。それにつづく「海軍勝利祝」は日露戦争緒戦の仁川沖、旅順におけるロシア艦隊の撃沈をさす。日記にも「昨十日夜宣戦の詔勅出づ」とあるように、宣戦布告の詔勅が煥発され、かてて加えて緒戦でのこの大勝利に、歌子自身も「勇ましき事なり」といささか興奮気味である。重なる慶事に際会した喜びのあまりに、歌子は祝意をこめ

て、「将校兵士らへ赤飯ふるまはん」と思い立ったのである。その意味で、歌子はまぎれもなく、国民国家の進展にそのまま自己の欲望を重ねうる〈明治の児〉だったようである。階級意識に根ざした3ランクの注文のしかたも、時代の意識を反映している。階級意識と言えば、そればかりではない。寄宿の将校、兵士への〈ふるまい〉こそが noblesse oblige と名づけてしかるべきものだからである。

さて、敷地1200坪、建坪330坪の穂積陳重邸は、牛込区払方町九番地にあった。旧幕時代、払方町はその名の示すがごとく、幕府の財務に携わる役職者の居住する地域であった。北に納戸町、南に牛込見附を、東に神楽坂若宮町を控え、西は市ヶ谷に接していた。払方町は見附に近く、あわせて高燥地という土地がらのゆえに、明治以降も高級な屋敷町という町の性格を維持していた。また、隣接する市ヶ谷一帯に、陸軍士官学校をはじめとして、多くの陸軍施設が広がっていたことは、だれでも知っている。だからこそ、日露戦争開戦を目前に控えた2月6日、近衛後備歩兵第一、第二連隊をはじめとする将兵たちに戦時動員がかかったおりに、穂積家に対して「軍人達若干名」「兵士二十五人程寄宿の依頼」があったのである。

その夜から早速、将兵たちの寄宿がはじまる。寄宿所に定められたのは、町内でも穂積邸だけにはとどまらない。「旧青柳宅のあきや」にも兵士20名、隣家の織田邸にも6名の下士官、兵士たちが寄宿しはじめる。〈向う三軒両隣〉が等しなみに将兵たちの宿营地になったのである。そればかりではない。穂積邸は近衛歩兵第一大隊本部となり、筋向いの首藤邸は第二中隊本部、長井邸は炊事場となる。また、防疫のための種痘、歩調訓練、被服・防寒用外套の支給などの諸手続きで、門前や町内はごった返す。最終的に将兵たちが払方町から出立していったのは2月17日のことであった。穂積邸が臨時の寄宿所に当てられたのは2月6日からだったから、都合11日間の滞在ということになる。ちなみに、町内からも「俄に招集にあひ明朝出発小倉に趣」かなければならない俵屋なども出す。そうした人びとへの歌子の慰問については別に記す。

もちろん、こうした将兵たちの寄宿は、無償で行われたわけではない。10日後の2月26日、区役所を通じて、陸軍省から「軍人宿泊料金十三円余」が支払われた。しかし、紀元節の夜の弁当代だけでも9円40銭だったし、一旦は受領された宿泊料金も「軍事寄付金の中に加ふべし」と記されている。だから、実際には、この給付金も穂積家の家計に算入されることはなかった模様である。

ところで、紀元節の夜の〈ふるまい〉の筵席は、なぜ設けられたのか。もちろん、日露開戦の国民的昂揚が背後にあることは言うまでもない。さきに、重なる慶事に際会した喜びのあまりに、歌子は祝意をこめて、と述べたゆえんである。現に2月29日には、九段の遊戯館へ夫とともに、仁川沖海戦の際の「戦利品ワリヤク号軍艦旗」をいち早く見物に出かけたりもしている。

しかし、それとは別に、将兵たちに配給された夕餉の貧しさが、歌子の心をうったふしがある。寄宿のはじまった2月6日の項にいう「あまり気の毒なれば」の字句に、その間の事情はうかがわれる。

渡りたる弁当は竹皮包にて、麦交りの飯に蛤のつくだ煮少々たくあん一切入り居り、あまり気の毒なれば明日より食物は大てい此方より出す事とす。

また、翌7日の項に、「旧青柳邸のあきやに合宿し居る兵士二十人は昨夜寒気と空腹の為に大に困却せし由」を聞き及び、「気の毒に思ひ今夜うどん三十人前見舞として送る」とある。ここにも、「気の毒」の語はくりかえされている。自宅に寄宿した伍長のひとりが「疲労の為病気になり」、近所の医者呼んでやった記述もみえる。賄い状態のこうした貧寒さは、将兵たちが非常呼集された当日だけにとどまったものか。旬日にわたって継続されたものなのか。それとも、日を逐うておもむろに改善されていったものなのかは、記述されていない。

『明治卅七年戦役 陸軍政史』（陸軍省、1911）などによれば、当時の糧食は一日精米6合、肉類40匁などと定められている。だから、おいおいに改善されていったと考えた方が自然だろう。

そうではあるけれども、おりしも厳冬のさなかの、将兵たちへの給食状況のあまりもの貧寒さを見るに見かねて、歌子は寄宿の初日から「此方よりも肉汁物等添え」てやったりする。あきやへ「うどん三十人前見舞として送」ったり、大福餅を贈ったり、すしを取ってやったりもする。また、噂をきいた阪谷芳郎をはじめとする親戚、知人からも、それぞれに蜜柑や汁粉、すし、支那うどんなどが差し入れられたのである。慰問品は食べものだけには限らない。散歩のついでとは言いながら、これも歌子自身の手で、近所の小間物屋で「兵士に与ふべきくつ下」を求めたりもしている。

隣家の織田邸に寄宿した伍長については、別に記しておこう。細川と名のるこの伍長は、華族女学校校長、男爵細川潤次郎の長男一之助で、夫人は満州軍総司令官大山巖の二女だったことが、のちに知られる。日清戦争の際にも、志願兵として台湾に従軍しながら、「病の為欠勤がちなりし故少尉となられず」、「はや後備の終り年にて又招集にあひしが士官とならざりしを後悔す」とは、当人の述懐である。当時の陸軍の兵役は現役3年、予備役4年4カ月の常備兵役、その後5年の後備兵役（参謀本部編『明治卅七年戦役 日露戦争』第1巻、1912）であった。だから、「はや後備の終り年にて」という細川一之助は、この年30歳を超えていた勘定になる。

2月8日に細川一之助が隣家に寄宿していることを知った歌子は、早速、その旨を細川家へ電話で報せてやる。翌朝には、母と妻とがひそかにたずねてきたりもする。風呂を勧めたり、紀元節の夜、自家に寄宿している8名の士官のなかに

細川伍長を特別に加えているのもそのためである。2月17日の出発の際には、歌子自身は軍列中の細川伍長を見はぐってしまうのだが、「家人の云ふによれば宅の前にてさへはや重荷につかれしさ見えしとの事」。装備の重さによるめきながら行進している老兵の無惨なさまに、歌子はまたまた、「誠に気の毒の事なり」という感慨をもらすのであった。

3——凱旋祝賀会顛末 穂積邸のばあい

1905年（明治38）10月23日の東京湾における連合艦隊の凱旋大観艦式、同12月17日の陸軍の大パレードを頂点にして、この年の秋から翌年の春にかけて、日本各地で各種の凱旋式が盛大に挙行されたことはよく知られている。その一方で、ポーツマス条約を不満とする国民たちが9月5日、「日比谷焼打事件」に激発するという出来事もあった。

歌子自身も、連合艦隊の大勝利の報に接した5月30日には、一面識もなかった東郷平八郎夫人を、アポも取らずにいきなり訪問して、祝意を述べた。また、講和条約成立の号外を読んだ8月30日には、「はれなばと待ちし雲間の月の影 あはれ光のみちもたらはぬ」の腰折れに、ポーツマス条約への「不平」の意を託したりしている。洪沢栄一、穂積陳重、阪谷芳郎という各界のトップたちに取りまかれ、その分だけ各種のトップ・シークレットにも通じていたはずの歌子もまた、いつの間にか、戦時下のナショナリズムの昂揚に単純にコミットし、感染している模様である。だからこそ、12月17日の日曜日には、伝馬町の洋品店の二階を借り受け、娘3人や使用人たちとともに、大山巖総司令官、児玉源太郎総参謀長以下の陸軍将兵たちの大パレードを見物するのであった。

満州軍総司令部、第一軍司令部、近衛師団司令部、歩騎砲工輜重、すべて一万余人、しとど降る雨の中を肅々として練り来る。(……) 近衛歩兵第一第二並びに騎兵聯隊の軍旗、征清征露の二大戦を経て僅に竿と縁のみをとどめたるは殊に尊く、将士の服のしぼるばかり濡れたるはいとど同情を深くしぬ。

ここには、事態を白眼視する批評的な目のはたらきは影を潜めて、どこにも捜しようがない。それに代わって、去年の2月に自宅に寄宿したゆかりも手伝い、近衛歩兵連隊への身びいきな感傷が書きつづられているばかりである。折悪しく篠つく雨も、そぞろ征戦の苦難へ思いを馳せる絶好のコンディションとして捉えられている。こうしたロマンティックな感傷と、市井の人びとのそれとの間に横たわっているはずの距離や落差のあまりもの小ささの方に、いまはむしろ、驚かされるのである。

ちまたのこうした昂揚した戦勝気分を反映して、穂積邸でもまた、凱旋の祝宴

が開かれた。『穂積歌子日記』11月26日の項にいう。

宅にては朝より凱旋祝の仕度とりどりのいそがしく、客室に忠孝の掛物をかけ、わき床に甲冑をかざり、錦木と菊とを活けたり。(……) 深川邸より借りたる紅白の幕小旗小提燈其外にて天井壁ふすま等を一杯に装飾し、見ちがへる程花やかなる室となりぬ。(……) 四時三十分頃より谷中尉塩川中尉永田少佐松根大尉大島氏細川一之助氏追々に来臨。(……) 兵士二十六人、塩畑大川笠井佐藤の四軍曹も招き、貞水の講談、長短槍仕合佐野山の二席あり。(……) 将校の馳走は多加羅亭の西洋料理一円五十銭シャンパン付、下士以下弁松赤飯煮しめ五十銭、みかん榮太樓の菓子。

このたびの仕出しも、弁松の赤飯と多賀羅亭の西洋料理とだったから、前年の紀元節の晩餐のそれと、そのまま平仄^{ひょうそく}が合っている。ただし、今回は、何といっても晴々しい凱旋祝賀会なので、去年の火急な注文とは一ランクも二ランクも品が変わって、特段に上等なメニューを奮発していることは、あらためて断るまでもあるまい。「シャンパン付」「煮しめ」付の語に、そのあたりの様子うかがわれる。

余興に呼んだ貞水の講釈以外にも、福引きあり、落語・剣舞・はやり歌などの隠し芸の披露あり、蓄音器の演奏ありで、主客ともども一夕の歓を尽くした。はては、将兵たちによる穂積陳重の胴上げまで飛び出す始末であった。もちろん、子どもたちも室内のデコレーションやら福引き券の作成やらと、準備段階から奔走してくれ、歌子は「これまで人を饗応することあまたたびなれども、今夕ほど快く面白かりし事はかつて覚えず」と記している。当夜の祝宴のにぎわしさがしのばれる。

ところで、当夜の凱旋パーティに招かれたメンバーは、一体、だれだれだったのか。

これより先、前年2月の非常呼集の場合と同じく、10月27日にあらかじめ「凱旋すべき近衛後備一、一大隊宿舎の儀」の依頼があった。そして、11月20日に先着の軍曹5名が到着し、23日からは将校5名、兵士26人が宿泊する運びになる。ちなみに、このたびは「寝具食事等此方にまかなひ頼む」とのことであった。かれらが除隊になって、最終的に穂積邸を引き払うのは12月2日のことであった。こうしたプロセスのなかで、「今度宿泊の将校兵士」を中心に、「昨春来懇意になりたる永田少佐外将校四五人、在京の兵士五六人」を加えて、「祝凱旋の宴開かん」との相談が整ったのである。

そうは言っても、「紅白の幕小旗小提燈」に飾られた祝勝気分の蔭で、さきの紀元節の宵の小宴には参加し、このたびの凱旋祝いの筵席には欠けてしまったメンバーも、何人かいたはずである。歌子はそのことについては口を緘して、何も

語っていない。帰ってこられなかった将兵はだれだれか。

ここでもう一度、出征の際に「宅の前にてさへはや重荷につかれしさま見えしとの事」と憫笑された、細川一之助伍長のその後の足どりをたどってみよう。それというのも、前掲の記事中で、かつての「細川伍長」は「細川一之助氏」と表記があらためられているためである。この呼称の改変の背後には、かれの一身上の変化が反映している。

細川伍長は1904年2月17日の出征以来、第一軍にしたがって朝鮮の安州城まで行った。しかし、そこで病をえて、同所に一カ月のあいだ滞留する。来襲した露軍との交戦で奮戦し、二六新報にその名が掲げられたのはこのときのことである。細川の病は脚気症であった。のち後送されて除隊、無事帰宅した、との報知を歌子が留守宅からの電話で報されたのは8月8日のことであった。細川伍長の日露戦争従軍体験は約半年という勘定になる。それらのことは、9月7日に穂積邸へ除隊の挨拶にきた際の談話を記した記述によって知られる。歌子は当日のくだりに、「僅かに安州まで行きたるだに其人の実話を聞けば中々面白し」と感想を漏らしている。そのほかにも、細川伍長と同様に脚気症をえて、後送されたものに渥美大尉、山口中尉、伊藤軍医などがいたことが、日記のはしばしに散見される。周知のことがらとは言え、そして、本誌掲載の内田論文にも見えるがごとく、日本軍将兵たちのあいだに脚気症のいちじるしく蔓延していたことは、『穂積歌子日記』の記述によっても裏書きされているのである。何はさておき、上記の将兵たちは、この夜の招宴に参加できた幸運な人びとだったのである。

一方、6月15日にウラジオ艦隊に撃沈された常陸丸に乗船していて、艦と命運をともした人びとのうちに須知中佐、松崎大尉、柏木中尉、小山中尉、川口二等軍医などがいた。近衛後備連隊の連隊本部とその主力700名が全滅したのである。そのほかにも、大岡中尉の従卒佐々木卯太郎は様子嶺の激戦のさなかに「壮烈なる戦死を遂げたり」とある。先発隊として常陸丸の難をのがれた永田少佐もまた、楡樹林子附近の戦闘中に負傷している。ちなみに、夫の郷里の宇和島や牛込区の出征者のなかからも、南山や大石橋はては遼陽の戦闘で多くの戦死者を出しているのであった。さらには、黒溝台大戦のおりに行方不明になり、どうやらロシア側の捕虜となつたらしい兵士の、母への慰問もしばしば語られている。穂積陳重の胴上げに終わる凱旋祝賀会のドンチャン騒ぎのなかで、これらの無名戦士たちへの弔問の感慨は、どうやら忘れかけられているようである。

4——出征軍人家族への慰問 (付) 息子たちと軍隊

日露戦争期に穂積歌子が関係していた諸団体とその役職は、彼女の社会的地位を反映して、すこぶる多岐にわたっている。その主なるものを挙げれば、大日本赤十字社正会員。慈恵委員慈恵会幹事。愛国婦人会会員。出征軍人家族慰問婦人

会理事。同牛込区専務委員等々である。まさしく *noblesse oblige* と名づけてしかるべき、旺盛な社会的活動である。それらのなかから、出征軍人家族慰問婦人会への歌子のコミットのありかたを拾ってみる。

出征軍人家族慰問婦人会が発足するのは1904年2月25日のことである。

[2月25日] 華族会館へ行く。浜尾高木山脇其外の五夫人の発起にて出兵家族慰問婦人会なるものを企て、これに付ての相談会を今日開く旨通知ありしによる。熱意には至極賛成に付出席せしなり。毛利黒田の奥方たちを始め夫人方大凡五十人ばかり参加せらる。下田歌子女史此企ての要旨を演説せられ、毛利男爵規則に付て話せらる。

ここには、下田歌子をはじめ、著名の婦人たちの名が列記されている。しかし、煩を厭うて、逐一は注しない。むしろ、ここで立ちどまっておくべきなのは、その意図や成果はどうであろうとも、彼女たちの戦時体制への対応の素早さの方であろう。*noblesse oblige* は正常に機能していると言うべきか。

[3月14日] 夕向ふの川田常子殿来訪、慰問会より当牛込区にて公民権を有する二千人以上の家の夫人宛勧誘書出す事となりし由にて状袋三百枚持来、裏へ会の名しるす事を托さる。二百は石田に書かせ、百は夕食後旦那様手伝い下され自分したため、夜九時川田へ持たせやる。

[3月15日] 慰問会委員会に行く。(……) 委員等始めて慰問に行く節、上等の家には画はがき、貧困の家には歌を染めたる手ぬぐひ持参する事に定む。

[3月18日] 夕山口川田両夫人来訪あり。以後宅にて慰問会牛込事務所を引受けくれよとの事。否みかね承諾す。

こうした準備活動ののち、牛込区内の出征兵士たちの留守宅への精力的な慰問が開始される。ちょっと前後するが、歌子の守備範囲である牛込区の出征兵士数を確認しておく。

[4月4日] 慰問会より牛込区出征軍人の数問合せあり。鈴木警部に調べもらひたる数、出征軍人総数四百九十七人、救助を要する家族七十六戸といふ事。

鈴木警部は穂積家の借家人である。3月15日の項にも見えるように、これまでも、そしてこれからも、歌子は封書の裏書き等の事務作業に書生や女中、ばあいによっては「旦那様」の手を借りることがしばしばある。

[3月20日] 午前おくにさん同道、矢来町へ出かけ、随分たづねめぐりし上

杉山貞吉、安藤福次郎らの宅を訪ひ家族に面会す。(……) 安藤の家は古道具屋故水さし一つ贖ふ。帰途北町三十三石川岩吉宅を訪ふ。家計困難の様子なし。次に中町二十二天野兼次郎宅を訪ふ。父は左官にて猶かなり働けさうなり。

慰問活動の開始である。以後、この種の無名戦士の留守宅への慰問活動は三日に一度の割合で、戦争終結の約一年半後まで持続的に展開される。『穂積歌子日記』1906年2月15日の項にみえる最後の慰問記事を挙げておく。

午後袋町小林豊吉、柏木庄七、若宮町島村、中町天野、たんす町福田、同小林福太郎の六戸を慰問す。小林豊吉、島村勇松、小林福太郎の三戸へは凱旋祝として金子贈り、以後慰問をやむる事とす。天野福田らも近日帰宅なすべしとの事。柏木は未だに消息分らず。気の毒なり。

この柏木という兵士こそが、前節の末尾でも触れた、黒溝台大戦のおりにロシア側の捕虜となつたらしいという風説の主人公である。一時は「たしかに在露国捕虜中に居る由」の風説も立ち、歌子は母を呼んでその旨を話し聞かせてやり、老母もまた「大によろこびぬ」という局面もあった。しかし、それもどうやら浮説であつたらしく、この段階でも柏木の消息は依然として不明なまなのであつた。「気の毒なり」という歌子の善意とはかかわりなく、柏木家の戦争はまだ終わっていない。

それはさておき、穂積陳重夫婦には、四人の息子がいた。日露戦争開戦の1904年に16歳になつたばかりの四男貞六郎は別として、長男重遠は22歳、次男律之助は21歳、三男貞三は19歳になっていた。いずれも上級学校に在籍しているか、それをめざしていたが、長男・次男は丁年に達していたし、三男もほどなくそうなるはずであつた。つまり、穂積家は、いつ出征兵士を出しても不思議でない家族構成だったのである。

ところで、ここに注目すべき記述がある。いずれも、1904年にかかる。

[2月5日] 律之助徴兵延期願区役所に出す。

[5月25日] 律之助午前区役所に行き徴兵猶予証書を受けぬ。

この年夏に、重遠は帝大法学部に進学し、律之助もまた、一高三年生に進級したことを考慮に入れば、在学なかばに出されたこの徴兵猶予願は、当然の措置と考えられよう。ただ、先述したように、徴兵猶予願を出した翌6日から近衛後備歩兵連隊の将兵たちの穂積家への寄宿がはじまったことを参照するとき、そこ

に伏在していることがらの皮肉に、だれしもちょっと立ち止まらざるをえないのである。

しかし、このときはまだ、事態の深刻さはさほどには顕在化せず、矛盾の露呈は先送りされた模様である。それが露呈するのは5月21日のことである。

[5月21日] 昨夜深更ふとしたる事より又貞三の海軍志願談出づ。同人にいろいろ説論の旨あり。

この夏に中学校を卒える予定の三男貞三は、年のあらたまつたころから、進路志望として「海軍に入り」たいと洩らしていたようである。だが、その段階では「旦那様より貞三にねんごろにおさとし」がなされ、貞三もひとまず、海軍への進路をあきらめたかのように見うけられた。ところが、一旦は鎮静化したと思われた貞三の素志は曲げられることがなく、ここに至って再燃したわけである。「又」の語に、そのことは顕著にうかがわれる。父兄や叔父とは異なった道に進みたいという青春客気の志と、おりから戦時下のヒロイックな時代の空気が、貞三の海軍兵学校志望を強力に後押ししていただろうことは、想像に難くない。「いろいろ説論」のあげ句、結局は両親の側が折れて、叔父の穂積八束を副保証人に立て（叔父からも「海軍志願は不適當と思はれ不賛成なれ共」という説論があった）、貞三は海軍兵学校を受験することになる。受験結果に先回りして言えば、持ち前の咽喉の不具合のせいで、不合格であった。貞三の進学問題をめぐる悲喜劇はひとまず落ち着いたのである。

こうした悶着のさなかに、思わず口を衝いて出たであろう歌子の「何も、お前さんが海軍さんになることはないじゃないか」という科白を、トーゴー・ターンで名声を博した東郷夫人への突然の表敬訪問や、ポーツマス条約への不平の歌や、陸軍の凱旋パレードの見物や、さらには前後二度にわたる穂積邸での祝宴を一方の極におき、日ごとに戦病死したり、俘虜になったりした区内500人にあまる出征軍人の家族の慰問に出精するばかりか、ともに涙する場面を他方の極に置きながら、同じ意識の土俵にのぼせるとき、歌子の混乱ぶりは明かである。息子たちに徴兵猶予願を出させたり、海軍兵学校志願に反対する彼女の一面は、あえて酷な言い方をすれば、階級的エゴイズムがあらわでさえある。

だが、しかし、そうした複合感情を抱えこんだ穂積歌子の心意を断罪することに、本稿の目的はない。そうではなくて、進学や就職、出産や育児、生活の糧をえるための日々の労働や、ときには慰安をもふくめて、生活者の生活そのものと意識との双方に否応なく落ちる戦争の影の種々相を、穂積歌子というひとりの女性をケース・スタディとして、素描してみたのであった。

[しおざき ふみお]